

「出稼ぎ」労働移動の性格と村落構造－八ヶ岳南麓村の酒造出稼ぎにおける事例考察

早稲田大学大学院人間科学研究科 矢野 晋吾

本報告では、諏訪地域で伝統的に行われてきた酒造出稼ぎを、母村の村落構造との関連性を軸に考察してゆきたい。

調査地である長野県富士見町瀬沢新田区は、八ヶ岳南麓の標高約1000mの場所に位置し、農業を主として営む集落である。標高の高さに加え、地質も古村が開発しなかった火山灰質の荒れ地で、米の作柄は非常に不安定であった。それゆえ、米作だけで生活することは難しく、大豆、稗、蕎麦などで生計を補ってきた。明治以降も、昭和の初頭までは養蚕、昭和初期から菊、高原野菜、1980年からカーネーションなど、高収入の作物を町内、あるいは諏訪地方でも真っ先に取り入れて、町内の農業の牽引車となってきた。

だが、生活の不安定性を払拭するための方策は、商品作物の導入にとどまらなかった。冬の間の農閑期を利用した「農間稼ぎ」がその典型である。瀬沢新田区を含むこの一帯の村では、ほとんどの家が、農業と農間稼ぎを組み合わせることで家業経営を成り立たせてきたのである。

戦後、稻作の安定化、菊や高原野菜など高収入の商品作物の導入を背景に、伝統的に行われてきた下駄の歯入れや鋸の行商など、ほとんどの出稼ぎが淘汰される中で、酒造出稼ぎだけが現在まで存続している。酒造出稼ぎが存続した背景には、主に2つの理由があげられる。①地縁を基礎にした集団出稼ぎ形態、②特殊技能獲得による昇進制、がそれである。つまり前者は、地縁を中心とした集団なので、本人も、送り出す家族も安心できるという特徴につながる。後者は、杜氏という人事権をはじめとする強い力を持つ酒造の最高責任者を頂点とした、職能を基盤とするヒエラルキーを有する集団ということである。出稼ぎ者は、厳しい仕事に耐えれば昇進の機会が開けてくる。農業や他の仕事と違って、資源を持たないものでも、技術さえ磨けば道は開ける。そして、杜氏に昇進すれば、高い収入を得られる。同時に、自分の指揮で仕込んだ酒が鑑評会で入賞すれば、諏訪に多くの酒造出稼ぎ者を出している母村にすぐに知れ渡り、村内で高い評価を得ることになった。

これに対し、出稼ぎに出ていない村人も、酒造出稼ぎ者を積極的に評価している。例えば、区長経験者を見ても、酒造出稼ぎ経験者が非常に多くなっている。酒造出稼ぎ者、とりわけ杜氏は経済力があり、しかも蔵での厳しい仕事に耐え、地位を高めたことが、蔵の中だけでなく村の中でも認められ、威信に影響しているのである。そして、酒造出稼ぎに出ること自体が村の中で規範化している。多くの村の人が言うように、「百姓の大きな、金持ちの家が、酒屋に行く」というイメージをもたれ、実際に経営規模の大きな農家ほど酒造出稼ぎに出る傾向が見られる。

このように、瀬沢新田の酒造出稼ぎは、地縁を基礎にした集団出稼ぎ、特殊技能獲得による昇進性などの特徴をもっている。それゆえに、出稼ぎ先での地位・威信が村落内のそれと強く結びつくという特性をもち得た。その点で、従来、主に出稼ぎ研究の対象となってきた水田単作地帯の出稼ぎ労働と異なっている。特に、出稼ぎ者を送り出す村落と、出稼ぎ先である酒蔵とが切り離された存在ではない点が注目される。伝統的な酒造出稼ぎ労働が、先述のような性質を有するゆえに、威信体系や規範など、母村における社会構造と深い関連をもちながら展開してきたのである。